川崎市総合教育センター研究紀要14:243-254. 2001

平成１２年度

教育相談を生かした中学校の生徒指導

－とじこもる不登校生徒の心を開く教育相談－

カウンセラー研修１研究会議

学校現場における カウンセリングの在り方

カウンセラー研修２研究会議

教育相談を生かした中学校の生徒指導

―― とじこもる不登校生徒の心を開く教育相談 ――

カウンセラー研修員　堀米　達也(川崎市立西高津中学校)

Ⅰ　主題設定の理由

最近，毎日のように新聞，テレビから青少年の犯罪が報道されている。そして，その犯罪の残虐性に驚かされる。学校現場においても様々な問題が山積し，対応に苦慮している。戦後，日本経済はめざましい発展を遂げた。物質が豊かになり何でも簡単に手にはいる時代になった。しかし，それとは裏腹に，心の豊かさを手にいれることが難しくなってきたように思う。心の豊かさの欠如は，どのようなことが原因と考えられるか，単純に答えを求めることはできないが，人間関係の希薄さに帰するところが多いのではないだろうか。家族の人間関係は，生活様式が変わることによって，一人一人が部屋をもつようになり，個人化してきている。遊びにしても，昔は，集団で遊ぶことが多かった。しかし，現在は，一人でも十分に遊べる道具が揃っているため，一人で遊ぶ子供が増えてきた。友達をつくるにしても，ネットワークを活用し，顔が見えない中でつくっていくことができる。そのため，肌と肌とのぶつかり合いはいっそう少なくなってきている。人は，人とふれ合うことによってはじめて豊かな人間性が育っていく。中学校の生徒指導においても，生徒同士が，また，生徒と教師とが豊かな人間関係をつくっていくことが基本になるのではないか。人間関係をつくるためには相手を理解し認めていこうとする姿勢が大切である。このような視点から主題を「教育相談を生かした中学校の生徒指導」とした。

また，本研究では，人間関係を拒絶し，とじこもる不登校の生徒に焦点を合わせて進めた。不登校の小，中学生は，平成１１年度には全国で１３万人を超えた。川崎市でも，1000 人を超えている。児童生徒数が減少しているにもかかわらず不登校の子供の数が増加する傾向がみられる。不登校の背景には，学習の遅れ，友人，教師とのトラブル，家庭内の問題等様々な要因が絡み合っていると考えられる。これら複合した問題をかかえ不登校になっている生徒への指導は，どの中学校においても大変重要な課題である。不登校の現状を知り，そこからのぞましいかかわりを探っていきたいと考え，副題を「とじこもる不登校生徒の心を開く教育相談」とした。

Ⅱ　研究の内容

１．受理会議・事例会議を通して

毎週１回受理会議が行われる。受理会議では心理相談員や指導主事の方々から報告がされ，全体で検討される。報告の内容については大変きめ細かく，生育歴や家庭環境さらに来談者の服装，表情，しぐさ等，非言語的な事柄にも及ぶ。来談者の悩みや苦しみ，問題の本質を知るためにカウンセラーは神経を集中している。学校現場においても，日常的に教育相談を行なっているが，センターのようなきめの細かさに欠けてしまうことが多いように感じる。そのため，問題の本質がつかめず現象面だけでものを見たり，教師の思いこみが先行したかたちで問題を解決しようとすることが少なくない。受理会議では，来談者のありのままの姿を受けとめていく姿勢の大切さを学んだ。また，相談活動の方向性を決めていく際，精神科のドクター等を含め多数の人による意見交換がされている。一つのことを多角的，多面的に見ることによって問題の本質に迫ることができ，解決のためのプロセスをより

的確に組むことができる。学校現場では，どうしても学級担任が抱え込むことが多いため，物事を一方向でしか見ることができず，いきずまってしまうことがある。センターのようなシステムをつくることは簡単にはできないが，担任を支えるチームをつくり，効果的に相談活動を進めていければと思う。

月ごとに行われる事例会議では，カウンセラーから事例について細かく報告がされる。クライエント一人一人の状況は違っているが，不登校に関する事例が多い。事例会議でなによりも驚かされるのは，カウンセラーがクライエントの心と体の様子を冷静に観察していることであった。プレイ中はカウンセラーがクライエントの心に寄り添い，遊び相手として接している。カウンセラーはクライエントと心と心の交流，体と体のふれあいを基本としながら，見立てやカウンセリングの方向性が正しいのか常に冷静に振り返りをしている。スーパーバイザーからは，的確な指導助言があり，カウンセラーはそれを受けて，今までの流れを検討しつつカウンセリングを進めている。事例会議を通して感じたことは，カウンセラーはクライエントとの人間関係を何よりも大切にしていることであった。そして，クライエントのありのままの姿を受け止め，その姿の中に問題解決の糸口を見いだし，カウンセリングを進めている点であった。

2．教育相談に関する講座や研修を通して

教育相談初級，教育相談実習講座をはじめ各種の研修会に参加した。研修ではグループワーク，ロールプレイング，サイコドラマ，アサーショントレーニング，ミニカウンセリングなどを学んだ。グループワークでは，対人関係能力の向上，役割遂行能力の向上，自己と集団・組織を変革していく力，状況に応じたリーダーシップの発揮を目指して行われる。課題解決作業，結果発表の後必ず十分時間をかけて振り返りが行われる。振り返りをしていくと，集団が課題の解決に向けてどのように協力していったか，また自分が集団の中でどのような役割を果たしていったかが明らかになってくる。教師は学校の中で，常に学級集団や部活動の集団，委員会等の集団をいかに円滑に運営していくかという課題を課せられている。グループワークを取り入れることは，学校生活において各自が自己理解，他者理解を深め集団の人間関係づくりをより円滑にしていく一助になるのではないかと感じた。

筑波大学の 石隈利紀先生は「援助チームの理論と実践」で次のように述べられた。「教師，スクールカウンセラー，保護者は協力しながら，子どもの学習面，心理・社会面，進路面，健康面での課題の取り組みにおける問題状況と自助資源・援助資源についてのアセスメントを行い，問題状況の解決をめざした援助を計画し実践する。そのプロセスでそれぞれの立場で子どもに援助的に関わる。複数の援助者が（援助チーム）として協動することで，心理教育的援助サービスのレベルが向上する。そして，学校組織へのコンサルテーションを通して，援助サービスの実践と経験が学校教育システムとして蓄積されるとき，すべての子どもが公平に良質の援助サービスを受けることができるようになる。」[1] 学校現場では，どうしても学級担任が一人で問題を抱えている場合が多い。教師間で気軽に相談しあい生徒にかかわっていければ問題の解決がより見えてくるはずである。しかし，現状は教師間の連携が不十分である場合が多い。援助チームの考えを学校に定着し，実践していくことによって，生徒の抱える様々な問題に，より柔軟に対応できるだけでなく，教師間の信頼関係もさらに深まっていくように思う。

ロールプレイングやサイコドラマでは相手の気持ちになって考えることを体験できた。普段，子ど

[1] 石隈利紀「学校心理学」誠信書房　2000年　p.260

もたちに相手の気持ちになって行動をしよう，言葉掛けをしようと指導しているが，実は自分自身が相手の気持ちとはかけ離れた言動をとっている場合が多いことに気づいた。特に不登校の生徒の役を演じたときはそのことを切実に感じた。教師の一言が子どもと保護者にどのように受け止められているか，また，どのように働きかけると子どもも保護者も安心するのかなど，学ぶことが多かった。

現在，人間関係をうまくつくれない子どもたちが増えてきている。アサーショントレーニングでは怒りや苛立ち，不安を相手に攻撃的に表現するのではなく，互いの人格を尊重しながら表現していく方法，つまり自分の考えや意見，気持ちを正直に率直に適切な方法で表現することによって，相手も自分も大切にすることができ，豊かな人間関係をつくりだすことができることを学んだ。

また，ミニカウンセリングでは，「聴く」ことの大切さと難しさを学んだ。聴くこと，話すことは人間関係をつくっていく上で基本的なことである。この研修では５分間相手の話を聞きその様子をテープに録音して振り返りを行う。「聴く」といった一見受動的な行動に自分の心があらわれる。そしてその心次第で相手は心を開いたり閉じたりする。相手が心を開く開かないは聴く側の姿勢によるものだ。この研修ではカウンセリングの基本である「傾聴」について学ぶことができた。

３．国内研修を通して

国内研修では，不登校の問題について様々に取り組んでいる他都市の諸機関を訪問し，不登校の兆候の発見から初期対応，支援の継続，学校復帰の際の支援のあり方等を学ぶことができた。研修先は富山県氷見市教育研究所，京都市立永松記念教育センター，愛知県総合教育センター，名古屋市子ども適応相談センター（名古屋フレンドリーナウ）の４カ所である。

富山県氷見市教育研究所では教育相談訪問員の先生より話をうかがった。氷見市の教育委員会では平成９年・１０年度の２年間にわたり，文部省の「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方に関する調査研究」の委託を受け，不登校の問題に取り組んできた。氷見市内には６校の中学校があり，生徒数は約 5200 ～ 5300 人位いる。その中で，毎年２０～３０人の長期欠席生徒がいる。研究所内に併設されている適応指導教室には年間７～８人がやってくる。適応指導教室での指導，援助について下記の３点についてお話を聞かせていただいた。

①「居場所」としての適応指導教室での指導，援助の在り方
②校外学習，体験学習を取り入れた活動の在り方
③学校，家庭及び関係機関との連携の在り方

京都市立永松記念教育センターではカウンセラーの先生より教育相談活動全般について話を聞かせていただいた。永松記念センターでは，相談活動を月曜日から土曜日まで（第２，４土曜日を除く），午前９時から午後９時まで（ただし，土曜は午後５時まで）行い，市民が幅広く利用できるようにしている。相談件数は平成１１年度で中学生２４７件，小学生１６８件，高校生１０３件となっている。教職員からの相談も多く毎年約６０件ある。相談の内容は半数以上が不登校に関することである。カウンセラーの先生は，「思春期にはさなぎの時期がある。外からは動きが止まっているように見えても，内面では大きな変化が起こっている。親は殻を破ろうとする子どもを見守り，時には支えてあげることも大切である」と話されていた。学校の相談活動については，スクールカウンセラー配置校が中心となり，１つのエリアを決め，エリア内の学校であるならば，どの学校の生徒がスクールカウンセラーに相談に行ってもよいことになっている。心の教室相談員の方とスクールカウンセラーが連携をとり，相談活動を進めている。

愛知県総合教育センターでは教育相談研究室長より，話しをうかがった。同センター相談室の特徴として，高校生のケースが多いことが挙げられる。また，相談時間が，通常１時間程度で行われているが，ここでは１時間３０分の時間をとっている。１時間３０分あると，あわてずゆっくり話を聞くことができ，来談者が満足して帰られるとのことであった。その他に，箱庭療法の有効性を認め，積極的に取り入れていた。室長から不登校について，事例を通して様々なことを教えていただいた。特に母親のかかわりについては母親ノート法をすすめていた。母親ノート法とは，子どもとの会話を詳しく思い出して書いてもらいその内容を，子ども主導型，快の原則（治療的な会話）に沿う会話パターンに日々変えてゆく方法である。

名古屋市子ども適応相談センターは，昭和５０年代から急に増え始めた不登校の児童生徒を対象に教育相談，適応指導をすすめるために開設された。センター内は明るく，木の温もりが感じられる心地よい作りになっている。施設面も校庭・体育館・宿泊施設等があり大変充実している。センターでは，保護者と学校との話し合いに基づき，校長名によって相談申し込みを受けている。これは，学校と家庭，フレンドリーナウの三者が互いに連携し合っていくことが子どもを援助していくうえで，欠くことができないものであるという考えによる。この三者の連携を，「トライアングル方式Ｉ」と呼んでいる。

不登校についてはどの都市においても重要な課題となっていることを肌で感じた。また各都市によって工夫をこらし地域の特性を生かした取り組みがされていることが大変勉強になった。この研修を通し何よりも感動したことは各先生方が情熱をもって相談活動に携わり誠意を尽くして子供たちと向き合っている姿であった。

４．実際の面接を通して

９月から中学１年生のＡさんの面接を行った。Ａさんは小学校３年より登校渋りが始まった。中学校に入学し，不登校になったため教育相談センターへ来ることになった。私は，「いよいよ研修の成果を発揮する時がきた。」ちょっとした気負いと，大きな不安を感じていた。教育相談センターの一室で，「何の面識もない子どもとどのようにかかわったらよいのか，果たして話をしてくれるだろうか，会話ができるだろうか，それより何より面接に通ってきてくれるだろうか」と，不安は募るばかりであった。初回の面接のとき，Ａさんに「こんにちは」と声をかけた後，言葉に詰まってしまった。さあ，これから５０分間どうしよう「困った」これが私の実感であった。Ａさんは，部屋の中を見渡し，気に入っているゲームを見つけ，それから二人でゲームをすることになった。ゲームのやり方を一通り説明してくれた後，Ａさんが主になってゲームを進めていった。初回の面接が終わったときは本当にほっとした。振りかえってみると何かおかしいことに気づいた。カウンセラー研修員の私は，不登校のＡさんの何か手助けをするために面接に臨んだはずだ。しかし，この面接で助けられたのはＡさんではなく，私自身であった。Ａさんは初対面の私と話をしてくれたばかりでなく，自分から進んでゲームをしてくれた。もしＡさんが一言も話さず，ただじっとしていたら私は何もできず，何もできないばかりか，教師としての自信も，希望も失っていったと思う。私は目の前にいる不登校のＡさんに救われた。今まで学校で何人もの不登校の生徒とかかわってきたが，かかわりの姿勢を少なからず修正しなければならない。いつも心の奥底に，自分がこの問題のある生徒を救ってあげるのだと言う，傲慢な気持ちをもっていたように思う。生徒とのかかわりによって救われたのは，私自身であった。

２回目の面接からはＡさんに対する思いは変わった。「Ａさんは私を救ってくれる人であり，また，私が変わるきっかけを与えてくれる縁深き人である」と。そう思うと，体から緊張感がとれ多少なりとも自然な形でかかわっていくことができた。Ａさんも３回，４回と面接がすすむ中で表情が明るくなり，感情を表現する場面が多くなってきた。回を重ねるごとにＡさんとの関係ができていく実感がもてるようになった。お互いの心の中に，それぞれの存在が認められていくようであった。言葉で表すことは難しいが，何も知らない人間同士が出会い，そして関係し，互いの存在を掛け替えのないものとしていく実感がした。７回目の面接のとき，今までとは違ったゲームをやることになった。単純なゲームなのですぐ止めてしまうのではないかと思ったら，Ａさんは大変気に入ったようでなかなか止めようとはしなかった。相手を倒すことが気持ちよいのか，ストレスの発散になるのか分からないが夢中になっていた。徐々にではあるが，自分の感情を他人の前で素直にだせるようになってきたことの表れではないかと感じた。会話は一段とスムーズになり，面接の時間が終わっても部屋の中にある玩具や箱庭の道具を見ていて，すぐに部屋の外に出なくなった。Ａさんは，プレイを通して自己主張をするようになってきたと同時に相手のことを思いやるようにもなってきた。もともとそのような気持ちはもっていたが，他人の前でうまく表現できずにいたのではないかと思う。次の段階として，適応指導教室等に入級し，小集団の中で人間関係がつくれるようになっていければと思った。Ａさんとのプレイを通し様々なことを学んだ。教育相談を行って変わるのは，相手ではなくまず，自分自身である。自分が変われば，それを相手が感じ取り，生徒が自ら変容していく。また，カウンセラーは，クライエントの言葉にならない言葉を，心でしっかり受けとめることが大切である。そのためには，カウンセラーの豊かな感受性，人間性，洞察力が不可欠だと思った。Ａさんとの貴重な体験を学校現場で生かしていきたいと思う。

Ⅲ研究のまとめと今後の課題

１．研究のまとめ

青少年に関する問題は年を追うごとに深刻化している。その背景に，子どもたちを育成するはずの家庭・学校・地域の崩壊があるのではなかろうか。子どもたちを育む大地が崩壊すれば，子どもの心が崩壊するのも当然といえよう。崩壊をまねいた原因はいったい何か。簡単には言えないが社会の仕組みが時代とともに変わり人間関係が希薄になっていったことが考えられる。かつて日本は農業社会であった。農業社会では家族を中心に地域との結びつきが大変強かった。地域全体が子どもを育む土壌となり，その中で育てられていった。学校は地域の教育力に支えられながら，地域の学校としてその役割を果たしていった。農業社会から工業社会へと変わり，生活様式も変わっていった。人口は大都市に集中し，地域も大企業を中心に形成されていった。家庭での子育ては母親の仕事となり，父親は高度成長期の企業を支えた。現在は，情報化社会の波が大きく押し寄せてきている。人は家にいながら世界中の情報を簡単に手に入れることができる。居住環境の変化や情報化によって個人化がますます進んだ。自然に人とのかかわりが希薄になっていく。希薄になっていくことが他者に対して無関心へとなり自己中心的な人間になってしまう。ここに大きな原因があるのではないか。心理臨床相談員の方々は，面接を通し，心の機能が育っていない子どもたちが多いことを訴えていた。また，それを解決するためには家庭教育の見直しが必要で，特に乳・幼児期の親のかかわりが重要であることを話されていた。不登校の生徒は，人間関係の中でストレスがたまりうまく処理できずにいる。複雑な人間関係の中で悩んでいる人々は実に多い。人は人間の中で傷づき萎えてしまう。しかしその傷を癒

し元気づけてくれるのも人間である。この１年間の研修を通し学んだことは，人と人とのかかわりの基本である。他者を理解し認めていくことが大切なのは十分理解しているつもりでいても，実際の場面では相手の気持ちが分からず，人間関係をこじらせてしまうことがある。生徒のありのままの姿を見つめ，発する言葉に耳を傾けることは教師として当たり前のことである。しかし，今までの自分の姿を振り返ると，本当に生徒の真の姿を見つめることができているか，どこまで心の叫びを受けとめることができたのだろうか，はなはだ疑問である。センターでの研修は，生徒一人一人を受けとめるとはどのようなことなのか，また，具体的にどのような言葉かけやかかわりをしていくことが大切なのかを学ぶよい機会になった。

２．今後の課題

学校では，今まで以上に教育相談的なかかわりが必要となってくる。その第一歩は教師である自分自身を変えていくことである。意識が変われば生徒との会話が増えてくるばかりでなく，会話の質が変わっていくと思う。伝達的な会話から心の会話に変わることによって，生徒の今の状態がより理解できるばかりでなく，適切な対応が可能になる。特に不登校の生徒については初期対応をどのように行ったかで展開の仕方が大きく変わる場合が多い。

また，教育相談センターのような相談の専門機関ではない学校で，どのように教育相談を組織化するかである。現在ある教育相談の組織を整備し，より円滑に相談活動が推進されなければならない。各校にスクールカウンセラーが配置される予定になっているが，カウンセラーと教師との連携をいかに図っていくか，まして援助チームを作って相談活動に取り組むならば，よりわかりやすく機能的な組織にしていく必要がある。担任は学級内の様々な問題を一人で抱えてしまう場合が多い。難しい問題は山積しているが，学校の現状をよく見つめ，できることから着実にはじめていければと思う。

最後になりましたが，この研修の機会を与えていただいたことを感謝するとともに，ご指導ご助言をいただきました教育相談センターの方々，及び勤務校の校長先生をはじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

石隈利紀『学校心理学』誠信書房　2000 年
内山喜久雄編著『臨床教育相談学』金子書房　1996 年
東山紘久『母親と教師がなおす登校拒否』　1999 年
國分康孝，米山正信『学校カウンセリング』　1992 年
國分康孝『カウンセリングの理論』　1997 年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター研修指導主事　伊藤　一晴

学校現場におけるカウンセリングの在り方

カウンセラー研修員　松井　隆夫（川崎市立西中原中学校）

Ⅰ　主題設定の理由

現在の中学校現場では，不登校，いじめ，喫煙，校内暴力等，さまざまな問題が発生している。それは，校内だけにとどまらず，校外での万引き，恐喝，窃盗，薬物乱用，他校とのトラブル等へも，エスカレートしているのが現状である。不登校生徒の増加の現実と荒れる学校の問題は，少なからず，どの学校にも共通する問題であり，教師がかかえている大きな悩みの一つでもある。

そのような中で，生徒指導も後手にまわってしまい，事後処理にほとんどの時間を費やすことが多くなってしまっている。不登校生徒の対応にしても，引きこもりや連続欠席などが見られてから慌てて動き出すこともしばしばである。しかし，そのような事後の問題を解決していくことが，生徒指導の中心的な仕事なのであろうか。

生徒指導担当者として４年目が過ぎようとしている私も，同じような悩みを抱えている教師の一人である。教科教材研究，事務処理，部活動など時間に追われる生活の中で，生徒一人一人とゆっくり話をする機会があまりにも少なかったような気がする。何か事が起きてから，初めて生徒たちと話をすることがほとんどであった。したがって，話の内容は，事件の流れやその原因であり，たとえ生徒の気持ちを聞くことができたとしても，事を起こしたことに対する反省の気持ちなどで，これでいいのだろうかと思いながらも，その忙しさに甘えてきた。

昨今，「学校教育相談」の必要性が，学校現場の中でも叫ばれている。いじめ，不登校などの相談は，「心の教室」「相談室」「保健室」の活用等職員一丸となって取り組まれている。しかし，教育相談の方法，時間の確保，心の教室相談員と教職員との連携など，大変難しい問題が発生していることも現実である。

西中原中学校では，心の教室相談員・校長・教頭・養護教諭・生徒指導担当者との打ち合わせ会を月に１回設けている。連携という面では情報交換もスムーズにいき，大変機能している。しかし，相談に訪れる生徒や保護者の数は月２件ほどで，勇気を出して訪れることは難しく，気楽に相談する雰囲気にはほど遠い。また，悩みを解決することから逃げてしまい，「今日が楽しければいい。」「人に迷惑をかけなければ，何をしたっていい。」などと，自暴自棄になってしまっている生徒もいる。このような生徒は，相談に来ることはなく，反社会的行動が目に見えてきたときに，初めて気づくことが多い。

この後手の指導を打破する方法は，問題の発生がまだ見えない時期の生徒たちとのコミュニケーションではなかろうか。問題を起こした後の処理や指導だけではなく，彼らの初期の注意信号を事前にキャッチできれば，また，常に子供たちの声を聞く体制が取れていれば，彼らをそこまで追い込まなくて済んだかもしれない。

そのような中で，今年度川崎市総合教育センターのカウンセラー研修員として教育相談についての研修を受ける機会を与えていただいた。心を開くカウンセリングの重要性を学ぶことによって，現場の後手の指導から少しでも前進するために，主題「学校現場におけるカウンセリングの在り方」を設定した。

Ⅱ　研究の内容

1. 受理会議，事例会議を通して

受理会議での報告では，その数の多さに大変驚かされた。毎週１回の受理会議で，４件から５件の受理報告があり，月に一度の終結のケースは２，３件であるから，日を重ねる度に増加の一途をたどる計算となる。そして，不登校の主訴がそのほとんどであることにも驚かされた。その原因は，一概に決めることはできないが，学校での生活に起因しているものが多い。学校，教師に対する批判，いじめ，学力不振，そして非行。教師として学校現場でどう生徒に接するか。ここを訪れる親子は，すでに傷ついた心を抱えて来ているのである。生徒の信号を事前に察知できるのは，現場での教師しかいない。

受理会議に参加させていただき，臨床心理の先生方の絡まった糸をほぐすような並々ならぬご苦労を目の当たりにして，学校での教育相談の必要性を改めて痛感した。

事例会議は，相談員，ドクター，スパーバイザーなどいろいろな立場から一つのケースについて話し合うものであった。その会議に参加させていただき強く感じたことは，担当者が，そのケースにかかわっている時間の長さであった。長いケースは，数年もの時間の中で少しずつ来談者の心を開き，自らの変容を傾聴という方法で援助していくのである。学校現場ではこのカウンセリングの方法は，時間がかかり過ぎ，なじまないことが多い。だから，何かアドバイスをしなければと教師は焦り，即効性を望むことを考えてしまう。しかし，普段の生活の中で，生徒の心の状態を常に観察する目を持っていれば，事前に察知できたケースもあったのではないだろうか。日頃の教育相談の充実に積極的に努めていかなければならない。

2. 教育相談に関する講座や研修を通して

教育相談センター主催の教育相談研修コースに参加する機会を与えられた。「教育相談初級」「教育相談実習」併せて数十回に及ぶ講座を受け，教育相談への新たな理解と，その考え方を生かした援助の在り方を学ぶことができた。

グループワークトレーニングは，活動的であり，またゲーム感覚でプレイできるために生徒にも楽しく参加できるものであると感じた。そこでの言動が，いかに周囲の人々に影響を及ぼすか。また，自分や他のメンバーを肯定的に受け入れられるか。自己主張と自己開示を行いながら気を遣っていく自分が見えた。そして，自分と集団を大切にする思いやりの心が，外部からの圧力や指導ではなく，自然と内面から湧き出てきことに驚いた。振り返りを必ずするところにそのポイントが隠されていたように思える。

このことは，アサーショントレーニングにおいても再び学ぶことができた。自分の考えや意見，気持ちを正直に素直に適切な方法で表現できるか。自分も相手も大切に相互尊重をしながら自己表現していくことの大切さを教えてもらった。

援助チームの実習では，総合的な視点から子供を理解し援助することを学んだ。すべての生徒にとって，学校の教職員は援助資源であるということである。

今学校での生徒に対するかかわり方は，指導から支援へと変容している。しかし，それは言葉だけの変化として捉えてはいないだろうか。支援とは指導しないことではない。グループ学習をさせながら一言も教師が話さないことを良しとする授業を見たことがあるが，支援の意味を取り違えているこ

とに気づいていない例である。

この実習では，みんなが資源，みんなで支援という立場に立って，学年主任，生徒指導担当，担任，養護教諭などが一つのチームを作り，個や集団をサポートしていくという新しい支援の方法を学んだ。また，このメンバー相互においても援助し合うという独特の方法で，学校教育相談の組織化への一つの方法として興味あるものであった。

箱庭療法では，実際に箱庭を作る実習をした。レイアウトを考え，ミニチュアのモデルを使って，箱庭を作る。作る前まで，自分なりに考えた構想があり，人の目を意識した作品を作ろうと考えていたが，実際灰色の砂が入った箱の前に立つと，頭の中が真っ白になり，緊張の汗が流れる中で，やっとの思いで作品を仕上げた。作品をとおして自分が自然と表現されてしまった感じがした。自己開示，自己啓発とよく言われるが，まさにその瞬間であった。

自己を知りそして自己を理解する。そこから他者への理解が生まれる。その感性を磨くものとして，箱庭を自ら経験したことは，大変有意義であった。

その他，ロールプレイング，サイコドラマ，など様々な演習に参加させていただき，教育相談の実践を方法論だけではなく，自らが参加することによって，生徒の立場に立つことができたことは貴重な体験であった。

3. 国内研修を通して

学校教育相談の日常的取り組みは，各学校，各地域の特色の中で，さまざまな取り組みがなされている。今回，この研修では，そのような各地の実践・研究を学んだ。ここでは，各施設の先生方から示唆していただいたことをもとに，学校現場と相談機関の連携の在り方について，考えてみたい。

（1）津山市教育相談センター「鶴山塾」での研修

津山城跡を左に見ながら木々の緑の中を歩いて行くと，その並木の突き当たりに「鶴山塾」がある。もとは大正時代初期に建てられた数寄屋造りの割烹旅館だったので，教育センターとは思えない落ち着いたたたずまいである。環境のすばらしさと設定の妙に，子供たちに対する思いを強く感じた。

「鶴山塾」は，不登校や問題行動を持つ児童生徒への対応が学校の現場だけでは難しいとの声を受け，学校復帰に向けて，「学校・家庭・社会生活において悩みをもつ少年や親たちに適正な相談助言を行う。そして学校生活と緊密な連絡を取りながら学校教育の援助に寄与する。」を目的としているとのことであった。

学校と相談機関との連携については，守秘義務などの問題も絡み，すべてオープンというわけにはいかない。しかし，この「鶴山塾」の取り組みは，学校との連携が強く行われていることに感心した。

（2）京都市立永松記念教育センターでの研修

河原町通を西に入ったところにセンターはある。繁華な通りに近いにもかかわらず，静かな落ち着きのある雰囲気であった。地下１階地上４階の建物の中に，体育研修室（体育館規模）まで備えた施設である。

教育相談事業の概要の中で，教職員研修については，教職員が児童・生徒を心理的課題の面から理解し，「いじめ」問題や不登校の問題を早期に発見するなど，教育活動全般にわたり，効果的に指導をすすめられるようカウンセリングに関する教員研修を実施している。

教職員研修での不登校児の問題などの早期発見に関する研修など，学校現場におけるカウンセリングの重要性を考えた内容が取り上げられていることに感心した。

（３）岐阜県教育センターでの研修

岐阜県教育センターでは，平成１１年度までの相談システムをこの１２年度から大幅に変えたとのことであった。

創設された学校支援課「子供支援室」の目的は，一人一人の児童生徒の自立および豊かな自己実現を願って，個性の伸長を図るための支援をするとともに，教育相談の充実に努める。内容は，従来の面接相談，電話相談に加えて，学校が必要としている地域社会からの教育力を人材バンク的に集め，学校訪問の形で派遣したいとのことであった。

相談業務だけではなく，人材バンクからの人材学校派遣など「子供支援室」の言葉どおり，幅広い活動をしていることに感心した。

（４）名古屋市子ども適応相談センター（なごやフレンドリーナウ）での研修

目的は，何らかの心理的な理由によって登校できない子供を早期に学校へ復帰させるため，市内在住の小中学生を対象に，教育相談，適応指導等の事業を行うとのことであった。

これらの各県各市センターでの研修を通して，教育相談へのさまざまな取り組みを研修させていただいたことは，学校現場での生徒指導や教育相談の在り方に不安と疑問を持ち続けていた私にとって大変有意義であった。

学校，家庭，センターとの連携と一口に言っても，各県各市でのその方法は様々である。「鶴山塾」や「なごやフレンドリーナウ」では，不登校児童生徒に対して積極的に学校との連携を図り，学校復帰への教育相談をしているところが心に残った。また，その方法の違いに驚きながらも，子供の「生きる力」を支援していく斬新な発想やエネルギーに感嘆させられた。今回の各県各市における学校教育相談の研修を通して学んだことは，生徒指導の根本がその方法論ではなく「はじめに子供ありき」と言うことであった。

4. 実際の面接を通して

９月に入り，総合教育センターにおいて子供担当として初めて２人の不登校生徒を担当させていただいた。学校現場で不登校生徒とのかかわりはかなり経験していたが，４月から８月までの研修をとおして，学校教育相談の在り方について考え方が変わりつつある時期であったので，不安は隠しきれなかった。また，初対面の生徒，ましてや心に傷を負い，何とかして自分の今の生活を改善しようと勇気を振り絞って来所した生徒と，本当に会話することができるのであろうか。そのような思いの中で，緊張しながら面接に臨んだ。

（１）Ａさんのケースから

Ａさんは，現在中学３年である。部活動（卓球部）等での人間関係や，母親に対するコンプレックスなどが原因で不登校になった。

漫画本を離さず手に持ってＡさんは来室して来た。各部屋を案内し，Ａさんのプレイセラピーをど

うするか，考えながら観察していると,ある部屋で卓球のラケットとボールを手にした。卓球部に所属していることは，保護者担当の相談員から聞いていたので，かなり興味を示すのかと思って見ていたら，無言でもとの位置に戻したことが印象的であった。やはり部活動に対する何かの思いが働いているのか。最後に案内した地下の部屋にも卓球台とラケットとボールがあった。この時Ａさんの方から初めて「卓球をやりたい。」という意思表示があった。来室からこの間，１５分位であったろうか，緊張の時間は終わった。

学校現場では，アドバイスという形で，教師の方からいろいろなヒントや示唆をすぐに与えてしまう。子供たちの意志で何かを決定させる事がいかに少なかったか。誘導していきながら，あたかも子供自身が考えたかのようなテクニック的な指導を良しと思っていた私にとって，「真の意味での話を聴く」「自分の意志で行動させる」そして「焦らずに待つ」それらのことの難しさを痛感した。

その後のプレイでは，ほとんどの時間，卓球をやることが多かったが，徐々に将棋やテレビゲームもするようになり，会話ができる状態になってきた。

３学期に入り，Ａさんは西中原中学校の相談指導学級に通級し始めた。センターの予約もキャンセルすることが多くなり，順調な復帰のようであるが，これで良かったのかどうか，今でも疑問が残る。センターの目的の一つとして，学校復帰ということがあげられる。しかし，Ａさんの場合は，プレイを進めていくうちに，何かもっと複雑な要因があるような気がしてきた。６ヶ月間のプレイセラピーによって，何とかこれから話ができそうになってきた所であったので，残念である。

（２）Ｂさんのケースから

Ｂさんはちょうど高校２年の年齢に当たる。中学時代から不登校で，高校には進学していない。数年間の引きこもりのためか，来室時の印象は，小柄で色白のおとなしい感じであった。初日からビニール袋にバドミントンのラケットとシャトルなどを持参して来た。

Ｂさんはバドミントンが趣味で，家でも弟相手にプレイしている。自然とバドミントンをやることになった。初日から数回目の来室までほとんど自分から口をきくことがなく，黙々とバドミントンをし続けた。戸惑いはあったが，保護者担当の指導員のアドバイスもあって，手を抜かず真剣にプレイするよう心掛けた。その後初めてＢさんの方から，別の部屋でバドミントンをしたいと話してきた。その部屋は，ビリヤードやボーリングなど他の遊具がある部屋である。その時から，バドミントンの合間にビリヤードやボーリングをするようになった。他の遊具をするようになり，自然とＢさんの方からも話してくるようになった。楽しそうに笑ってプレイする顔も見られるようになり，今では数学のクイズを持ってきて，勉強のスタートも始まりかけている。

Ｂさんとのプレイをとおして，相談のスタート時の大切さを痛感した。学校現場では，その日の面接の中で，必ず何かアドバイス的なものを与えなければいけないと考えていた。そして，子供もそのことを望んでいると思い込んでいた。しかし，話を聴くということは，その結論を出すためだけではなく，心を開き合うことがまず第一の目的であることを学んだ。

Ａさん，Ｂさんのケースを経験させていただいて，学校での教育相談がいかに結果や即効性を目的としているか，また，相変わらずの指導型であるか，痛感した。傾聴することに耐えられなくなり，生徒が考えるための沈黙の時間を横取りし，ことばを代弁してしまう。この代弁は，得てして生徒の考えとは違うものであることが多い。結局，生徒自身が本当の気持ちを語る機会を，つぶしてしまっていたような気がしてならない。ここでの実際の面接を経験させていただいたことは，学校現場における教育相談の在り方を見直す良い機会となった。

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

現在学校現場では，教育相談への関心が高まってきている。これは，昔ながらの生徒指導では，今の生徒たちにおきている様々な問題を解決することができなくなってきているからである。不登校の問題，いじめの問題，学力不振からの怠学など複雑な問題が絡み，複合的な問題に発展している中で，何か打つ手はないかと教師は悩み，外部機関への連携も積極的に強化されてきた。

西中原中学校では，相談指導学級が設置されている。この学級に通う生徒たちは，決して学校が嫌いで登校しなくなった訳ではなく，むしろ学校は好きなのに登校できなくなった生徒たちである。人間関係で悩み，不安を抱きながらも通い始め，次第に自分を取り戻してきている。また，本校の普通級不登校生徒の中にも，この学級に入り元気を取り戻して通っている者もいる。外部機関との連携がスムーズにいった例である。

しかし，多くの生徒たちが，このような問題傾向を示す可能性があることを考えると，各分野の専門機関に任せておけばよいという時代ではなくなっているのも現状である。

このような学校事情の中で，学校教育相談の必要性については，だれもが考えていることであるが，現場の忙しさの中で，すべての教師がその技法を身につけることは大変難しい。だからといって，上辺だけの教育相談のまねごとでは，取り返しのつかないことになる。相変わらず，昔ながらの後手に回ってしまう生徒指導をし続けている原因はそこにある。しかし，問題傾向にある生徒や，注意信号を発している生徒に対して，内面からアプローチすることによる効果が大であるならば，忙しさを理由にせず，積極的に学んでいくことが大切なのではなかろうか。

幸いにも私は，今年度カウンセラー研修員としてこのセンターにおいて数多くのことを経験することができた。その中で，実際の面接や講座をとおして，「聴く」といくことの大切さを痛感した。それは，相手の話やその人の気持ちに関心を向けるということである。相手を理解し，相手が安心できる存在となったときに，初めて心を開き，心の中の言葉で話し合えることを学んだ。この経験を学校現場に持ち帰り，十分に活用できるようがんばっていきたい。

最後になりましたが，この研修の機会を与えていただいたことを感謝するとともに，ご指導いただいた教育相談センターの方々および勤務校の校長先生をはじめ，諸先生方に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

國分康孝『学校カウンセリングの基本問題』誠信書房 1988 年
今井五郎編著『学校教育相談の実際』学事出版 1993 年
坂野公信監修　横浜市学校ＧＷＴ研究会著『学校グループワーク・トレーニング』遊戯社 1994 年
坂野公信監修　横浜市学校ＧＷＴ研究会著『協力すれば何かが変わる』遊戯社 1994 年
全国教育研究所連盟編『だれもが身につけたい生徒指導・学校教育相談の技法』ぎょうせい 1998 年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター研修指導主事 伊藤　一晴